



確認

誰かが俺に対して人生の意義を求めだしたのは確か中学三年のころだ。自分らしさの決意表明を考えると高校受験が重なってひどく混乱していたのだ。結局前者は失敗し、後者は何とか成功した。

そして、春が来て。自分は未完の器のまま、何も満たされていない状態で高校生になった。

「なあ、君知ってるか、目的なく生きる人は人間となる過程の途中段階なんだぜ」
大きく読みずらそうな本をもって、ヨウスケは黒板に先ほどの言葉を書いていく。
また始まってしまったか…。彼がこういうセリフを吐くと長く解説されるのだ。

目的なく生きる人は人間となる過程の途中段階ねえ。目的をもって、それを果たした場合は一体どうなるんだ。このことをヨウスケに質問してみたかったが、まあ怒りそうだしやめときますかね。

「そういえば君、私がこの部に来た時、部室宛てポストに手紙が入っていたぞ。私はいまから先ほどの言葉を書かないといけないから読んでいてくれたまえ」

まさか、部の追い出し命令じゃないだろうな。とりあえず恐る恐る手紙を開けてみる。内容はこうだ。

『今日の放課後は屋上が解放されております』

なにこれ、自殺勧誘？

「何と書いてあった？」

ヨウスケは黒板に書き終えたのか、先ほどまで手に持っていた本を棚に直していた。

「今屋上が解放されいるだよ」

「ふーん、屋上がねえ、いったい誰がそんな手紙を書いたんだ」

「さあ、けどせっかくだし真偽を確認しに行こうぜ」

彼はここから階段に上っていくことが面倒くさいのか顎に手を添えていた。

「残念だが私は高所恐怖症でね、すまないが君だけで行ってきてくれ」

「わかった」

多分本当の理由は面倒なだけなんだろうが、しかたない一人で行くか。

屋上について少し考えてみる。まず、場所だ。本校には本校舎と別校舎があって、下から見る限り両方共に屋上はある。まあ、たぶん本校舎の屋上前には人感知ブザーがあったから空いてるとれば何も施されていない別校舎のほうだろう。

次に手紙主だ。最初はヨウスケを少し疑っていたが、別にあいつは屋上で何かイベントを起こすような奴じゃないし、まず何より極度な面倒くさがりだから違う。だとすれば、誰だろうか。特に俺たちは親しい人間は作っていないから余計持ってわからない。もしかするといたずらかもしれないしな。

なんやかんやを考えていると屋上のドア前に来ていた。ガラス防散フィルムを張っているせい

かドア越しの景色は日の光があるぐらいしかわからない。

ドアをひねってみる、あまり使われいないせいか錆びの摩擦がドアを開けることを困難にする。だが、確かに鍵はかかっていなかった。

そして、開けきった時、僕の目には何より美しい街の景色よりも何より美しい夕日の染められた空よりも目に入ったものがあった。それは少女だった。